

第一五回南のシナリオ大賞応募作品

与論ドル

登場人物

岡翔平（26） 不動産会社社員

阿野朱里（23） 居酒屋「テイダ」オーナー

浅野（58） 県議会議員

佐藤（47） 岡の上司

与論島の男達

おじいさん

「与論ドル」 あらすじ

接待の為に与論島へ訪れた岡。違法行為である政治家への接待に不満を感じつつ、仕事の為と準備を終える。上司への報告の電話をするが、その電話で更なるわがままな依頼を受け、イライラが募る。

気晴らしに酒でも飲もうと、近くにあった朱里が経営する居酒屋を訪れる。朱里は、日本の政治への不信感から与論島独立を目指す団体に所属していた。与論ドルという独自通貨まで発行しているという。

不満の解消の為に独立を目指す朱里は、不満を我慢し仕事をする岡を不憫に思い、与論奉獻でもてなす。朱里からの歓迎の酒杯を飲み干した岡は、言い訳をして不正の片棒を担いでいる自分を恥じる。

翌日、接待の中、溜まった気持ちが爆発した岡は、政治家の浅野に不満をぶちまける。

これが原因で仕事はふいになり、岡は退職するが、気持ちは晴れ晴れとしていた。

岡「鹿兒島県最南端にある与論島。俺は、接待の準備で、一人与論島を訪れていた」

電話の発信音。

岡「あ、もしもし。岡です。接待の手配終わりました」

上司の声「おう、ご苦労さん」

岡「お部屋はスイート。翌日は、シーサイドゴルフ場を貸し切りにあります」

上司の声「宴会の準備も出来てるよな？」

岡「海が見えるお庭でのBBQ。ワインはロマネコンティです！」

上司の声「コンパニオンは？」

岡「コ、コンパニオン？」

上司の声「おいおい。まさか手配してないのか？浅野先生だって、出張の時ぐらい羽をお伸ばしになりたいんだから」

岡「いや、でも。本当に何も無い島なので」
上司の声「それを何とかするのが、お前の仕

事だろ！いいか？浅野先生のお好みは、色
白ぼっちゃりだぞ！」

電話が切れる音。

岡「くそ！なんなんだよ！」

岡≡「接待相手は県議会議員。政治家への接
待は不正行為だが、与論島の再開発案件を
受注する為には、やらない訳にはいかなか
った」

海の音。砂浜を歩く足音。

岡≡「どうして俺はこんな仕事を……。いや、
余計なことは考えない。とにかく今日は酒
を飲んで寝てしまおう」

「カラン」とドアが開く音。賑やかに
笑い合う声。食器のぶつかる音。

朱里「いらつしやい！」

岡「一人なんですけど」

朱里「お客さんたびんちゆだね。どこから？」

岡「ああ、東京です。観光じゃないけど」

朱里「わざわざ、与論まで！」

岡「ここ、いいお店ですね。テイダ？」

朱里「こっちの言葉で、太陽って意味だよ」

岡≡「笑顔が素敵で女性だった。色白ぽっちゃりじゃないけど、頼んでみるか」

岡「あの……」

朱里「うち、与論ドルしか使えないけど、いい？」

岡「よ、与論ドル？」

朱里「あはは。大和の人は知らないよね。これだよ」

岡≡「ペラペラの、おもちゃのような紙幣だった」

朱里「一枚1000円だよ」

岡「500与論ドル？それ、日本円にすると
いくら分なんですか？」

朱里「そのまんま。500円分だよ」

岡「え！？二倍の値段！？ぼったくりじゃないか！」

朱里「嫌なら買ってくれなくていいよ。これ、
うちの団体への活動支援だから」

岡「団体って？」

朱里「与論独立同盟」

岡「与論、独立、同盟！？」

朱里「与論島を、日本から独立させたいの」

岡「何で？何のために？って言うか、そんな
こと出来るんですか？」

朱里「出来るかどうかはやってみないと分か
らない」

岡「はあ？」

朱里「ここで飲んでる連中は、みんな私の仲
間さ」

岡「なんだか面倒くさいことになって来た。
さくつと飲んで、とつと引き上げよう」

岡「分かりました。じゃあ、1000与論ドル分下さい。あ、領収書も」

朱里「ちよつと、待って」

岡「え？」

朱里「与論ドルを買ってくれるお客様には、私達の理念を話すことにしているから」

岡「えつと、じゃあ、お願いします」

朱里「今の日本の政治って腐ってるよね」

岡「はあ……」

朱里「政治家は椅子取りゲームに夢中だし、国民は、見ざる聞かざる言わざる。選挙にも行かないくせに、SNSで文句だけは言ってる」

岡「まあ、そうですね……」

朱里「誰かに期待するのも、無視されるのもうんざり！だから、私達は自分達で理想の国家を作ることにしたの」

岡「理想の国家って？」

朱里「誰もが自分の国に誇りを持てる国。胸を張って生きられる国」

岡「あの、お言葉ですけど」

朱里「うん？」

岡「それって、あなた達が政治家になって、今の日本を変えればいいんじゃないですか？」

朱里「茹でガエルの法則って知ってる？」

岡「いや、知りません」

朱里「カエルは、常温の水に入れて徐々に水温を上げていくと、死ぬまで気が付かないんだってさ。今の政界は茹でガエルの温床だよ。私は茹でガエルになりたくない」

岡「茹でガエル……」

朱里「どう？理念に賛同してくれる？」

岡「それって、大人の考えじゃない」

朱里「え？」

岡「誰だって、お金を稼いで生きて行かないやならない。少しの熱湯ぐらい、生きる為なら、飲むべきなんじゃないかな？」

朱里「そう」

岡「気に入らないことから逃げ出すのが偉い

とは思わない。少なくとも俺は、逃げない」

朱里「いいよ。考え方はそれぞれだもん。だけど、与論ドルは売れない。ごめんね」

岡「そうですか、じゃあ、いいです」

朱里「ありがとうございました」

岡「あ！あの」

朱里「何？」

岡「明日の夜って、空いてますか？」

朱里「え？」

岡「東京から、ある大物の先生が来るんです。それで、一緒に飲んでくれる女性を探していて」

朱里「何、それ？」

岡「3時間で1万円、いや、2万円です。どうですか？そうだと！与論ドルで払いますよ。悪い話じゃないでしょ？」

朱里「だから、与論ドルは売れないって」

岡「活動資金なんでしょ？協力しますよ」

朱里「……あんたも、茹でガエルって訳だ」

パンパン、と手を叩く音。

朱里「お客様に与論献奉をご用意して！」

男達「おーー！」

歓声と手拍子が上がる。

岡「な、何ですか？」

朱里「気が変わった。あんたを歓迎することにする」

岡「え？」

朱里「与論には、昔から伝わる、与論献奉つて言うもてなしがあるんだ」

盃に、酒を汲む音。

朱里「いい？こうやって、盃にいっぱい焼酎を注いで。はっかーなーど！」

男達「はっかーなーど！」

岡「え？え！？」

朱里「東京から来たお客さん！お名前は？」

岡「あ、えっと、あの。岡です」

朱里「岡さんね！私は朱里」

岡「朱里さん……」

朱里「じゃあ、まずは私から！私は、皆が誇りを持って生きられる国を作ります！」

男達「はっかーなーど！はっかーなーど！

はっかーなーど！」

ぐびぐびと焼酎を飲み干す音。拍手。

盃に、酒を汲む音。

朱里「さあ！次は岡さんの番だよ！」

岡「えっ、あの」

朱里「与論島に来た目的を言って、それから

飲むの！はっかーなーど！」

男達「はっかーなーど！」

岡「えっと、あの、じゃあ、いただきます」

朱里「待って！あなたは、与論島に何をしに来たの？」

岡「え？」

朱里「神様が見てる。話して」

岡「俺、俺は……。仕事で。不動産業をやつていて、次の仕事を受注する為に……」

朱里「次の仕事って？」

岡「新しい街を作るんです。住民の皆さんが喜んでくれるような、そんな街を」

朱里「素敵な仕事じゃない」

男達「はっかーなーど！」

朱里「はっかーなーど！さ、飲んで！」

ぐびぐびと焼酎を飲み干す音。拍手。

岡「ぐはあ！きつつー！」

朱里「岡さん、与論島へようこそ！とうとうがなし！」

男達「とうとうがなし！」

口笛や、歌い踊る声。

朱里「岡さん。仕事、頑張つて。私は協力出

来ないけど」

岡「ありがとう……」

朱里「さ、飲もう！」

岡≡「俺は、なんだか自分が情けなくて、苦しくて、その思いを押し流すように、酒を飲み続けた」

パチパチと火がはぜる音。

浅野「いやー、ここは最高だね！」

佐藤「ありがとうございます」

浅野「海を見ながら BBQ なんていいじゃない！」

い！」

佐藤「うちの岡が、全て手配致しまして」

浅野「そう！なかなかやるね、若いのに」

佐藤「（小声）おい、岡！コンパニオンは？」

岡「それが、あの……」

佐藤「（小声）何やってるんだよ！せめて、

二次会はクラブを予約しておけよ！」

岡「この辺、地元の人がやっている居酒屋ぐ

らしいかなくて」

佐藤「女の一人や二人、いるだろ！？しつかりしろよ！ここが、正念場だぞ！」

岡「はい、でも、あの。浅野先生！」

浅野「んあ？」

岡「今度の再開発事業のことですけど」

佐藤「おいおい、こういう場で仕事の話なんかするんじゃないよ！」

浅野「いや、いいよ。その為の出張だからね」

岡「道路が広がるのはいいけど、海や自然は守られるのかって言う質問が、住民の方から来ていました」

浅野「道路？違う、違う。ゴルフ場ね」

岡「え？」

浅野「あの辺の畑や山全部つぶして、大きなゴルフ場を作るの！」

岡「ゴルフ場？いや、あの、道路拡張工事の計画でしたよね？」

佐藤「おい、岡！」

岡「皆さん、与論島に遊びに来てくれる人が

安全に過ごせるならと、それで、大切な土地を手放す決心をしてくれたんですが」

浅野「ははは、それは70代80代のじいさん達の意見でしょ。あと、10年の我慢じゃないか」

佐藤「そうだぞ、岡！もうその計画で進んでいるんだ！話を蒸し返すな！」

浅野「海に見えるでっかくて、立派なゴルフ場を作るのよ。その方が、観光客も喜ぶでしょうが！がっはっはっは」

佐藤「申し訳ありません、先生！ささ、ワインをどうぞ！」

ワインをグラスに注ぐ音。

岡「は、ははは。そうか、そう言うことなのか」

佐藤「おい、岡。どうした」

岡「先生、これを事務所にお送り致します」

浅野「ん？何だ、これは」

岡「今回の旅行の、先生の分の費用です」

浅野「何だって？」

岡「政治家の方への、利害関係を含む飲食の

寄付は、法律で禁止されていますから」

佐藤「おい、岡！」

岡「払っていただけない場合は、今回の再開

発の件も含めて、新聞社にリークします」

佐藤「おい、岡！どういうつもりだ！？会社

をつぶすつもりか！？冷静になれよ！」

岡「自分に胸を張って生きていただけです。失

礼します！」

浅野「待ちたまえ、君。岡君だっけ？」

岡「はい」

浅野「払うよ、旅の資金。最初からそのつも

りだったんだから。もちろん、私のポケット

トマネーでね。あっはっはっは」

岡≡「政治家って、すごいな」

波音。

岡 ≡ 「三か月後。会社は、再開発案件から外された。俺は会社を退職した。今は東京で、フリーのアドバイザーとして、地権者さん達のお手伝いをしている」

おじいさん 「うーん。岡君、この資料、わたしにはちよつと読みづらいんだけどね」

岡 「あ！僕がお読みしますよ。えっと、これはですね……」

岡 ≡ 「与論島の再開発事業は住民の猛反対にあつたが、あつけなく進められているらしい。与論島が独立すると言うニュースが入って来るのも、時間の問題かもしれない。俺は時々財布を見る。朱里さんに頼み込んで譲ってもらった、与論ドルが一枚入っている」

了